



だまし男

---

に

だまされ男

---

石下郁子

---

## ある町に

---

ある日私の前を二人の男の人が通り過ぎました。

一人は坊主頭に、鉄なべをさかさまにしたような、顔の下半分に真っ黒なひげを生やし、目玉をぎょろりと光らせた人でした。

もう一人は痩せて髪を七、三に分け、グレーの背広を着て鞆を抱えた人でした。それがだまし男ケムケムさんと、だまされ男ヒトヨシさんでした。

ある町に人をだましてばかりいる男の人と、人にだまされてばかりいる男の人がいました。

だまし男は働くのが大嫌いでした。それで人をだましては金をせしめていましたが、その金で大酒を飲んだり、ケイリン、けいば、パチンコとギャンブルに使ってしまうので、いつも財布は空っぽでした。

だまされる男の人は働き者でしたが、そのお金をいつの間にか人にだまし取られてしまうので、やっぱりいつも貧乏でした。

二人は同じ町の、西と東に住んでいました。

この二人を空の上から見ていた神様は、心を痛めていました。

それで神様はそれぞれに夢を見させ、二度と同じ失敗をしてはならないと厳重に注意を与えた上で、二人を出会わせる事にしました。

その日、だまし男ケムケムさんは大金が入った財布を拾いました。でもそれを交番に届けず、パチンコをやって全部使い果たし、がっかりしてパチンコ屋から出てきました。

だまされ男ヒトヨシさんは給料をもらい家に帰った時、玄関前で待ち伏せていた人に金を貸してくれと言われ、持って行かれてしまいました。

家には赤ん坊と奥さんが待っているというのに。それで家の中に入れなくなり、肩を落としてトボトボ歩き出しました。

二人が町の中央広場でばったり出会ったとき、お互いに初対面だという感じがしませんでした。両方とも、自分がこれまで出会ってきた人たちにそっくりだったからです。

クシャクシャした気分で空き缶を蹴飛ばしながら歩いて来たケムケムさんは、ヒトヨシさんを見て思いました。

(だましやすそうな男だな、よし友達になろう)

一方のヒトヨシさんは思いました。

(この人と、係わり合いになるのは止めよう)

ところがケムケムさんが思いっきり蹴飛ばした空き缶が、ヒトヨシさんの足に当たって、ヒトヨシさんはその場にばったりと倒れてしまいました。

あまりの痛さに起き上がれそうにありません。

「おい、大丈夫か」

もとはといえば自分のせいなのに、ケムケムさんは親切そうに助け起こしました。

ヒトヨシさんはそれを大変ありがたく思いました。

こうして神様の思し召しどおり、二人は知り合いになってしまったのです。

でもこのとき二人は同時に、ゆうべ見た夢の事を思い出しました。

(ずるい事をするなという夢を見たのに、また人の財布の金を盗んでしまったなあ)

(だまされてはいけないという夢を見たのに、また人にお金をだまし取られてしてしまったなあ)

そのとき、ぴーぽー、ぴーぽーとサイレンを鳴らして救急車が走って来ました。

ケムケムさんはびくっとして身構えました。パトカーだと思ったのです。

「救急車ですよ」とヒトヨシさんが教えました。

そして口の中でぶつぶつ言った後

「なんなんだぶ、アーメン」と言いました。

それからいろんな神様、仏様の名前を出して祈りました。

「あんたは変な人だなあ」

ケムケムさんはあきれて言いました。

「救急車に乗る人が、どんな神様を信じているかわからないので、みんなに祈ったのです。どうか命が助かるように、もしダメでもそれぞれ好きな場所に行けるように」

「あんたは変な人だなあ」

とケムケムさんはさっきと同じことを言いました。

ところが救急車はすぐ近くに止まり、そこに空っぽになった酒のびんと男の人が倒れていました。寝ていたのです。

救急車の人は怒りましたが、念のため酔っ払いを車に乗せて連れて行きました。

ヒトヨシさんはベンチに座って考え事をしていました。奥さんや赤ん坊が、自分の帰りを待っているだろうと思っていたのです。

ケムケムさんの方もまた考え事をしていました。さっきの酔っばらいは友達だったのです。でもそれよりももっと重要なことを思い出しました。

「はらがへったなあ」

ケムケムさんはそうつぶやきました。パチンコに夢中で朝から何も食べていなかったのです。

「あの金でパンでも買っておくんだっ」

ヒトヨシさんはケムケムさんの言葉で我に返りました。

ヒトヨシさんはズボンのポケットの中を調べました。そこには小遣いの残りの五百円玉が一個入っています。

ヒトヨシさんはこれでケムケムさんにパンを買ってあげようかと思いましたが、でもまた、だまされたらどうしよう、とも考えていました。

「私はこれまで人にだまされるばかりでね。そのために貧乏で家族を泣かせてきました」

とヒトヨシさんが力なくつぶやきました。

「今日ももらった給料をそっくり人に渡してしまい、家に帰れなくなってしまったんです」  
ケムケムさんはなぜだか申し訳ないような気持になり、首をすくめて聞いていました。

でもヒトヨシさんは気を取り直したのか、

「おなかがすいているんですね。ここに五百円ありますからパンを買ってきましょう」

そして痛む足を引きずってコンビニまで行き、パンと牛乳を買って来てケムケムさんに渡し、  
自分もおなかがすいていたので水道の水を飲みました。そしてやっぱり奥さんと赤ん坊のことを  
考えていました。

朝から何も食べていなかったケムケムさんはガツガツとそれを食べました。

でもそのあとになって生まれて初めて、人に感謝する心がわきました。また生まれて初めて、  
人のためになる事をしようという気持がおこりました。

「あんたが給料を貸した人の家はどこだい」

「この近くです」

「よし、それなら今から取り返しに行こう」

そう言ってずんずん歩き出しました。

金を借りた人の家では酒飲み仲間が集まり、焼き肉パーティの真っ盛りでした。

ケムケムさんは戸をドンドンたたき、

「やい、やい、この人に金を返せ」とすごんで、見事に給料袋を取り返しました。中を見ると  
千円少なくなっているだけです。

「ありがとう、これで家に帰れます」

ヒトヨシさんはお礼に、と一万円を渡そうとしましたがケムケムさんは断りました。

「もう人にだまされるなよ」

ケムケムさんは生まれて初めて人のためになる言葉を口にしました。

「それでは、私の家て夕ご飯でも食べていきませんか」

「いやあ、俺にはお待ちかねのところがあるんでね、そこでめしを食わせてもらうつもりだ」  
とケムケムさんは胸を張って言いました。

「ありがとう、それではさようなら」

急に足が治ったヒトヨシさんは、ていねいにお辞儀をして、自分の家に向かいました。

ケムケムさんは「あばよ」と言ってヒトヨシさんを見送りました。

せいせいしたととてもいい気分です。

そしてこれまでやった悪い事を残らず思い出しながら、警察に向かって歩き出しました。

空の上の神様はほっと胸をなでおろしてそれを眺めていました。

## だまし男にだまされ男

<http://p.booklog.jp/book/75265>

著者：石下郁子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/thmo2535/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75265>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75265>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ